

「推古天皇御宇、百濟ヨリ鉄人ヲ大将トシテ日本ニ襲来リ、九州肥後ノ地ニ着クト風聞シケレハ、
おちのますみ
小千益躬勅ヲ蒙リ夷敵退治ハ家ノ先例ナリトテ、手勢少々率イテ九州へ発向ス。・・

其後、益躬ヲ案内人トシ數百艘ノ船ヲ率ヒ、中国指テ上リケル。程ナク播州ノ浦ニ着キケレハ、
鉄人ヲ馬ニ乗セ、須磨ヤ明石ノ裏山ヲ徐ニ歩シテ、・・益躬、蟹坂ノ辺ニテ、・・足ノ裏ノ矢所ヲ
見スマシ、思ウママニ（鉄人ヲ）射ケレハ、其ノ矢足裏ヨリ徹テ、頭ノ上三寸ハカリ染ミテ出ヌ」

【稲爪神社】（明石市大蔵谷）、祭神は、大山祇神、面足神、惶根命。併せて、伊和津比売大
神も祀る。神社の縁起よると、「推古天皇の御代、鉄人ぞろいの新羅軍が九州に攻めてきた。
伊豫の国司、小千益躬が「鉄人を撃退せよ」との皇命を受け、氏神の三嶋大明神（大三島の
大山祇神社）に勝利を祈ると、「鉄人の弱みは、足の裏にある」という神託が降った。

そこで益躬は、一計を案じて鉄人たちの道案内を買って出た。明石の浦に到り、鉄人たち
が休んでいた時、急に空模様が悪くなつて稲妻が飛び交い、雷鳴がとどろき渡った。すると、
どの馬は驚いて仁王立ちになり、鉄人を振り落として逃げ散った。益躬一党はこの時とばか
り、鉄人たちの足裏を狙つて矢を放った」という。

◆高皇産霊、高天原に現る  天照大神が高皇産霊と語つて高千穂宮に赴き、妻の日神を補佐
葦原中つ国平定の大義↓挙国一致して、外敵（遼東勢や呉軍）から国を守る体制づくり

①二一〇年代初め、騎馬軍団をこっそり手にした大己貴は、大物主の陣営だけを狙つて攻め立て
た。畿内の豊葦原瑞穂国が本家の豊葦原中つ国と袂を分かち、大物主にすり寄つたからだ。防
戦一方の大物主は負け戦が続いたあまり、大己貴を心底憎むようになった。日神も、大己貴に
豊葦原中つ国の建て直しや国譲りを妨害されたことで、怒り心頭に達していた。

この時期、内憂外患は、葦原中つ国や新羅だけに止まらなかつた。北の公孫氏や南の呉も虎視眈々とわが国を狙っていた。この南北からの侵略を食い止めるには、葦原中つ国を平穩裏に平定し、国を挙げた防衛体制を築く以外に道はなかつた。

② ここに至つて、外敵にやきもきしていた天照大神は、妻の日神と組む以外にないと悟つた。大物主や葦原瑞穂国までが天神の御子を葦原瑞穂国と日高国の王に迎えるのが最善と見て高千穂宮に使者を遣り、日神を口説きにかかる始末だつた。

そうしたことから、日神は邪馬台国との盟約を最優先して取り決めにかかりつきりになつた。「この国を外敵から守り抜くには、大己貴を説得して天神の御子に国譲りさせ、全軍の指揮を一本化せねばならぬ。先ずは高千穂宮に司令部を設置して、天照大神にお出まし願おう」天照大神も皆の期待に応える気持で、こう言つて快諾した。

「万全を尽くしたい。日神の護衛役に徹するためにも、十握劍と天（水）軍を貰い受ける。当然、日高国の最高位を襲名しておく。仏の道を極めて天台山の山王にまで昇つた故、経津主とも語りた。手土産がてら、瀛つ鏡・辺つ鏡・蛇の領巾・玉つ宝など瑞宝五種も奉じて参ろう」③ それから一月と経たない内に、天照大神は高皇産靈とも高木神とも語つて高千穂宮に姿をあらわし、久方ぶりに妻の日神や、稚日女として振舞う嫁の豊受姫と再会した。ここに、高千穂宮に瑞宝十種が揃つたことになる。

◆忍穂耳と天孫饒速日の降臨 ↓ 最初に忍穂耳、ついで天孫となつた饒速日（初代垂仁）が日向から大倭に向けて降臨

饒速日の降臨 ↓ 二一〇年代前半

①そこで、日神夫妻は倭奴国王朝の再現が直ぐに叶うと見て、太子の忍穗耳に大倭降臨を詔した。

「豊葦原の千五百秋ちいほあきの瑞穂国と大倭豊秋津島は、実り豊かな国です。吾が児の忍穗耳が天降つて治めなさい」

忍穗耳が万幡豊秋津姫よろずはたとよあきづ（栲幡千千たくはたちちを襲名、思金の妹）を妃に娶つて天降り準備を整えたところで、天孫が人目を避ける形で誕生した。

そうとも知らずに、高皇産霊はこの夫婦に火天神の長子（天鹿兎山と豊受姫の児）や彦火明（天鹿兎山と栲幡千千姫の児）を養子に押し込んできた。忍穗耳はこのやり口に不満を抱いたあまり、日神にこのように奏上した。

「装いを終えて天降りしようとした矢先に、唐突にも二人の天孫（皇孫）に恵まれてしまいました。そうであるなら、天孫のどちらか一方に降臨をお命じください」

結局、忍穗耳に代わって火天神の長子が饒速日と語つて天降ることになった。そのことで、日神夫妻は饒速日に先と同じ詔を降すことになった。

「豊葦原の千五百秋の瑞穂国と大倭豊秋津島は、実り豊かな国です。天孫の饒速日がそこに天降つて治めなさい」

『古事記』、「天忍穗耳、万幡豊秋津姫に生ませる子、天火明。次に日子火瓊瓊杵なり」

『先代旧事本紀』、「天照太神、詔して曰はく、『豊葦原の千五百秋の瑞穂国は、吾が御子、正哉吾勝々速日天忍穗耳尊の知すべき国なり』と言寄さし詔ごと賜ひて、天降したまう時に、

高皇産霊の児思兼神おもいかねの妹万幡豊秋津師姫栲幡千千よろずはたとよあきづし姫命を妃と為して、天照国照彦火明櫛玉あまてるくにてる

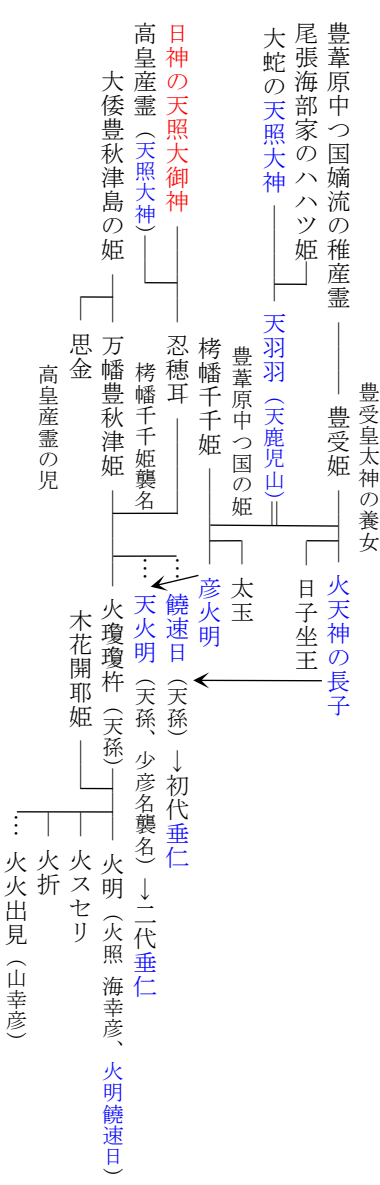
饒速日尊ニギハヤヒノミコ（他の登場人物から推して、単に饒速日尊であろう）、誕生す」

②こうして、饒速日は日神夫妻から瑞宝十種とともに、火天神の御子と印す天鹿兎弓・羽羽矢を

賜ったのち、天児屋こやね（中臣氏の祖）・太玉ふじたま（高皇産霊の養子、齋部氏の祖）・天鈿女うずめ（太玉の娘、高皇産霊の養女）・石凝姥鏡造りの祖（鏡造りの祖）・玉屋玉造りの祖（玉造りの祖）ら三十二人の近従、さらに天津真浦あまつまら（物部氏の祖）・天津物部二十五部族を引き連れながら大倭へ天降った。

その後の天孫は、河内国いかりのみね 嵯峯に降臨して大和国鳥見の白庭山に遷座すると、長スネ彦の妹・御炊屋姫を娶った。彼は姫との間に男子が生まれたなら、味間見うましまみと名づけるつもりでいたが、不幸にも姫の妊娠中に逝ってしまった。哀れに思った高皇産霊は饒速日の屍を天上（高千穂宮）に運ばせ、七夜七日にわたって葬儀をとり行ったという。

後日、饒速日が御炊屋姫の夢の中で教えて言うには、「我が兒に瑞宝十種を授けおくように。ついで登美白庭邑に墓を造り、天鹿兒弓・羽羽矢、神衣・帯・手貫の三物を副えるように」と。



『先代旧事本紀』、「時に正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、奏して曰さく、『僕將に降らむと欲い、装束う間に生れし児あり。これを以て降すべし』ともうす。詔して之を許したまう。

天神の御祖、詔して、天璽の瑞宝十種を授く。贏都鏡一、辺都鏡一、八握劍一、生玉一、死反玉一、足玉一、道反玉一、蛇比礼一、蜂比礼一、品物比礼一と謂うはこれなり。・

饒速日尊、天神の御祖の詔をうけて、天の磐船に乗りて、河内国河上、哮峰に天降り坐し、則ち大倭国鳥見の白庭山に遷り坐す。いわゆる天の磐船に乗りて大虚空を翔り行きてこの郷を巡りに睨りて天降り坐す。饒速日尊、便ち長スネ彦の妹御炊屋姫命を娶りて妃と為し、妊娠したまう。未だ産む時に及ばざるに、饒速日尊、すでに神損去亡坐しぬ。」

◆葦原中つ国平定 二一〇年代が終わろうとする頃

武甕槌が葦原中つ国に派遣された理由↓天之国の威光を一身に背負い、しかも高天の原と日神を守り抜く気概に満ちた武将

①日神夫妻は、再度、忍穗耳に大倭降臨を命じる他はなかった。

「豊葦原の千五百秋の瑞徳国と大倭豊秋津島は、実り豊かな国です。吾が児の忍穗耳が天降つて治めなさい」

暫くすると忍穗耳は、饒速日の天降りに随伴した天兒屋・太玉・天鈿女・石凝姥・玉屋らをそっくり従えながら大倭に向けて天降った。

忍穗耳一行が瀬戸内海を通過しようとする、大己貴の水軍があつちこつちから邪魔してき

た。忍穂耳がほうほうの体で高千穂に戻ってきたことで、日神夫婦は血を流すことなく葦原中つ国を譲らせる手立てはないものかと思案し続けた。しかし、これといった妙策は浮かばなかった。そこで、高皇産靈は高天の原に臣下全てを集めて、

「かつて、豊葦原中つ国は伊都国王朝開祖の天叢雲に対して、末代まで服すると誓った。なのに、暴れ者どもが国を乗っ取ったまま約束を守ろうともしない。誰を派遣して説得したらよいか」

と諮った。すると、皆の意見は、

「天神の御子である天穂日を送るのが良い」とのことで一致した。

ところが、この使者は大己貴の口車に乗って皇位を継ぎたい野心を抱き、三年経っても復奏しなかった。そこで高皇産靈は、再び皆と諮って天稚彦（天国玉の子、天神の御子）を火天神の御子とした上で天鹿兎弓・天羽羽矢を授けて葦原中つ国に遣わしたが、彼も下照姫（天日槍の元妻）を娶って大己貴の跡を継ぎたい欲に駆られてしまい、数年経っても復奏しなかった。

②ことが再三失敗したことで、高皇産靈は武力も辞さない決意で、高天の原に臣下たちを集めて、

「今度こそ、誰をやればよいだろうか」と諮った。一同が口を揃えて言うには、

「この役目を果たせるのは、豊葦原中つ国王朝をぶっ倒して出雲に追っ払い、怡土（糸島平野）の地に新王朝を打ち立てた伊都国嫡流以外に見あたらない。今、その当主の伊都之尾羽張神は吉野ケ里にあって、天安河（筑紫川）西域（佐賀平野）を手堅く治めている。彼が行かぬと言うなら、その児・武甕槌男がよい」と。

そこで、高皇産霊は皆に向かつて、「私の名代となる武甕槌男に経津主と語らせた上で、葦原中つ国に向かわせたいと思うが、皆の考えはどうだ」と言つて了解を求めた。

ついで十握剣も天（水）軍も授けようとしたところ、人からの推薦を待ち望んでいた天之尾羽張神の孫・武甕槌たけみかづち（記では、建御雷）が我慢できなくなって立ち上がるなり、大声でわめき出した。

「十握剣を奉じてこの任務が全うできるのは、天之国の威光を背負った自分以外に居ないではないか。かつて、天之国は豊葦原中つ国と一緒にあって伊都国を打ちのめし、古巢の吉野ヶ里に押し戻した。

その際、伊都国王はひれ伏して命乞いまでしたし、豊葦原中つ国も伊都国も日隈も、倭奴国王朝と十握剣に末代まで服すると誓った。その言葉でもって、皆は今日までのうとうと生き長らえることができたのだ」

彼はこのままでは会議を終わらせるものと粘りに粘っていた。日神と高皇産霊はその心意気にほれ込んだのか、彼に十握剣も天（水）軍も託して、経津主ともども葦原中つ国に派遣すると決めた。

③二一〇年代が終わろうとする頃、経津主と武甕槌は天（厳）軍を中軍と定めた上で、海神軍・女神大山祇軍・住吉軍・日隈軍の中から強者だけを選びすぐって遠征軍を編成し、大船団を組んで出雲へ向かった。三輪オロチ軍も山陰道を西へ西へとひた走っていた。大己貴が国譲りに応じなければ、東西から挟撃して討ち取ってしまう作戦だ。

遠征軍が出雲の稲佐浜（出雲市）に上陸すると、伊弉諾や天之国に恩義ある者らが続々と集まって来た。二人は彼らを前にして十握剣を振りあげながら、日神と高皇産霊の意向を伝えた。その間、一同はひれ伏したままで神妙に聞き入っていた。

ついで、武甕槌は大己貴をその場に呼びつけるなり、抜き身の十握剣をかざして大声を張り上げた。

「遠からず、外敵が襲いかかってくる。もはや、国中の者が日神の下に結束して立ち向かう以外に、この国を守り抜く術はない。

そこで高皇産霊は、この地に天神の御子を降して国の守りを固めたいと仰せだ。最近では素戔嗚までが、『この国を天神の御子に国譲りします』と申し送ってきた。我々はその談判にやって来たのだ。

返答次第では、火軻遇突智や天鹿兎山のごとく、この剣で真つ二つにしてくれるぞ」

この剣を見つめた者は、伊弉諾・天之尾羽張神・高皇産霊・素戔嗚の雄姿が走馬灯のように頭の中をよぎった。大己貴も葦原中つ国王と称した手前、この剣には逆らえなかった。彼は口先だけでその場を切り抜けようと図ったが、この時ばかりは時間稼ぎの浅知恵しか浮ばなかった。

「私一人では返事致しかねます。祭祀を担う我が兒・八重事代主やえことしろぬしからお答えさせましょう。しかし、彼は魚をとり美保（三穗）岬に出かけたままいで、未だ帰ってはおりません」

『日本書紀』、「二はしらの神、出雲国の五十田狭いの小汀おぼまに天降りて、則ち十握剣を抜きて、・

大己貴に問いて曰く、『高皇産霊尊、皇孫を降しまつりて、この地に君臨きみとしたまわむとす。故、先ず我二人の神を遣して驅除はらい平定しずめしむ。汝が意如何いひか。避りさまつらむや不いなや』とのたまう」

◆大己貴（大國主）の国譲り  天神の御子に国譲りする誓約は、玉虫色
高皇産靈↓孫子の兵法極意を達成

国譲りした大己貴↓日隅宮で、高殿祭神（月神、火天神の神皇産靈・天鹿兕山ら五柱）を祭祀
彦火明の妃選び（縁結び）に奔走し、三輪大物主の家督相続を拝命

①武甕槌はこの言葉を聞くなり美保岬に使いを遣り、力づくで八重事代主を連れ戻してきた。そして、大己貴の時と同様に荒々しい文句を八重事代主にぶつけた。すると、八重事代主はいつも簡単に応じてきた。

「恐し。この国は天つ神の御子に立奉らむ」
かこ たてまつ

この時の武甕槌は、葦原中つ国が天神の御子・忍穂耳に譲られるものとはかり思っていた。それでも念のためと思つて、「ほかに、意見を言う者はおるのか」と大己貴に問うた。すると、彼は答えた。

「もう一人います。私の子供で、全軍を統率する建御名方です」
存みなかた

そうこうしている内に、建御名方は千余の手勢とともに押しかけて来て、こう言い放った。

「国を返せと言うなら、力づくで決着をつけようではないか。こちらの力のほどを見せてやる」
この言葉は、たちまち血で血を洗う白兵戦と化した。戦いたけなわとなった頃、東から三輪オロチの大軍が群がり出てきて、勝負はたちどころに決した。建御名方はあちこち逃げ走って姫川上流へ、ついで信濃盆地に逃げ込んだ。諏訪湖の辺に追い詰められた彼は、両手をついて命乞いまでした。

「恐れ入りました。どうか私を殺さないで下さい。諏訪から、一步も外には参りません。父の大己貴にも背きません。八重事代主の命にも従います。国譲りする件につきましては、何ら異

存を申しませぬ。天神の御子の意のままに献上します」

『日本書紀』、「時に事代主神、使者に謂りて曰わく、『今天神、この借問いたまう詔有り。我が父、避け奉るべし。吾亦、違いまつらじ』という」

『古事記』、「(八重事代神、)その父の大神に語りて言いしく、『恐し。この国は天つ神の御子に立奉らむ』といいて・・」

②武甕槌は出雲に舞い戻ると、再び大己貴を呼びつけて尋ねた。

「お前の児の八重事代主も建御名方も、天神の御子に国譲りすると言っておるぞ。お前はどうかんだ」

大己貴もついに観念して日の像の鏡を差し出しつつ、平謝りした。

「葦原中つ国はもちろんのこと、吉備・播磨に至るまでそっくり譲り渡します。ゆくゆくは、私の住処のあった所に天神の御子の住みたまう御殿をお建てになって、この葦原中つ国を統治なさいませ。

さすれば、私めは敷地の片隅にある熊手のごときあばら家にこもって、慎ましく暮らしております。

私に代わって、児の八重事代主があなた様の露払い・殿となってお仕えすれば、私に従った百八十余の豪族らもよもや背きませぬまい。

ところで、火神の巖香具土・巖香具雷(共に豊葦原中つ國中興の祖)・火軻遇突智、それに火天神の神皇産霊・天鹿兎山ら五柱をこの国挙げてお祀りする節には、太い柱と高い千木を備えた天にも聳える火神の高殿(天御舎)をここに建てさせてください。さすれば、私めは豊葦原

中つ国の儀礼に則つて、日ごと五柱の冥福をお祈り申し上げております」と服従を誓つた。ついで広巾の日矛、日の鏡など日隈神宝をしぶしぶ差し出しながら、「日矛や日隈の威光を振りかざすことで、葦原中つ国を隅々まで平定できました。天神の御子もこれでお治めになると、出雲日隈もおとなしくなることでしよう」と言いつつも、熊野姓でありたい気持ちがありありと顔に出していた。

以後、高皇産霊は兵法極意を達成し、大己貴に国譲りさせたとして英雄視された。それでも彼はこの偉業に奢るどころか、祖霊の威光による賜物と感謝するばかりで、日ごと檜御柱と磐座の前に跪いてはお礼の言葉を申し述べていた。

『日本書紀』、「大己貴神、国平けし時の広矛を以て、一神に授りて曰わく、『吾この矛を以て、卒に功治せること有り。天孫、もしこの矛を用て国を治らば、必ず平安くましましたむ』」その後、経津主と武甕槌は津々浦々まで駆け巡つて残敵を平らげると、大己貴を連れて高千穂宮に凱旋した。そこでの二人は、日神と高皇産霊に日矛・日の鏡など日隈神宝、それに日の像の鏡を奉つてから、葦原中つ国平定のてん末を事細かに奏上していた。その奏上中に、日神は大己貴の国譲り時の言動を耳にするや、そつけなく命じた。

「大己貴は天照大神の家系に入るのです」

ところが、隣の高皇産霊は彼の望みも叶えてやろうと、横から口を挟んできた。

「お前の住家には、雨漏りなどせぬよう屋根に厚い茅を葺き、入口の上には楮で作つた太くて長い注連縄も張りつけなさい。そして陰ながら、そこを天日隅宮と名づけ、熊野櫛御氣野を日隈の神として、ついで佐太国の大穴持を水神として奉るように。また大己貴の希望通り、天孫

の一人に葦原中つ国を治めさせるとしよう。その敷地には早々に、五柱を祀る高殿を建立するように。その柱は太くて長い木を選びすぎり、貼り板も厚くて広巾のものを選ぶがよい。いずれ、天穂日(あまほひ)を司祭者として送り込む所存だ」

この言は、大己貴が内々に熊野姓を語っても差支えない、と言っているに等しい。

『日本書紀』、「時に高皇産靈尊、・大己貴神に詔して曰わく、『汝が住むべき天日隅宮は、今供造りまつらむこと、即ち千尋の楮繩を以て、・其の宮を造る制は、柱は高く大し。板は広く厚くせむ。』」

④この間、大己貴は日神と高皇産靈に平身低頭しながら不義だったことを詫びるとともに、心から服する態度をとっていた。その真心を見て取った二神は、次期大物主の位を大己貴に譲ることまで約束していた。こうすることで、両家の争う火種が自然と消滅するからだ。

これにも感激した大己貴は、頼りがいのある高皇産靈にもっと尽くしたいと念じたのか、「何事も仰せのごとくに従います。この機会に、彦火明の養育に加えて、妃を推挙する役目もお命じください。星のごとくきらめく姫君の中から、家柄も才気も兼ね備えた妃を選びすぐつてみせましょうぞ」

と願い出た。大己貴が彦火明の妃選定まで買って出たのは、高皇産靈と彦火明に終生仕えると誓ったに等しい。だが、その心の内は彦火明を倭王に立てる道筋をつけた上で、高皇産靈の懐に飛び込むことであつた。そうまで考えなかつた日神と高皇産靈は、彼の言葉を鵜呑みにして命じた。

⑤「我が孫、彦火明を養育せよ。八十万の神々を率いて、ひたぶる皇孫のために護り奉れ」
暫らくすると、日神は素戔嗚や大己貴に対して、次の詔を降すことになつた。

一、素戔嗚は、葦原中つ国の家督を猿田彦の児に譲る手はずを済ませておくように。
一、大己貴は伊和大神も兼ねて、我が孫の養育に励め。いずれ大物主の跡を継がせる。
その後、高千穂宮での奏上を済ませた大己貴は、出雲へ向かった。その跡を追いかけるようにして、彦火明一行が太陽のごとく光輝く鏡を王船の帆柱に掲げながら、出雲稻佐の湊に入ってきた。

やがて、多芸志浜たぎし（出雲市）に雲に届くような木組みが立ち上がった。天日隅宮でも工事が完成し、水天神だった天照大神御霊が熊野櫛氣野・大穴持の名で祭祀できる状態に至っていた。
『古語拾遺』、「大己貴神「一の名は大物主神。一の名は大國主神。・・大和国城上郡大三輪神是なり。」・・」

◆天孫  饒速日・天火明（彦火明、共に天鹿兒山の児）、火瓊瓊杵の三人が存在

彦火明↓天火明、火明饒速日（火瓊瓊杵の児、海幸彦）の二人存在

大倭に向かった天神の御子↓(1)忍穗耳、(2)饒速日、(3)忍穗耳、(4)火瓊瓊杵、天火明、

(5)火明饒速日

記紀や『先代旧事本紀』を丹念に調べると、饒速日、天火明、火瓊瓊杵の天孫三人がいたとわかる。饒速日と天火明は、火天神天鹿兒山の腹違いの児として誕生し、のちに忍穗耳の養子に押し込まれて天孫となった。それぞれが天璽や宝物を賜った上で、東や南に天降ったのである。ここで、天神の御子や天孫の降臨について整理しておこう。

(1)二一〇年代前半、忍穗耳が大倭降臨の準備を整えたところで、天鹿兒山の遺児二人を天孫として押しつけられた。親元を離れたくなかった忍穗耳は、天孫の降臨を日神に願い出た。

(2)代わって、天孫饒速日が日向から大倭に降臨した。ところが、ほどなく逝ってしまった。
(3)二二〇年代前半、つまり葦原中つ国の平定後、忍穂耳が再び降臨することになったが、大己貴と三輪氏の妨害にあい、つぶされてしまった。

(4)父に代わって、火瓊瓊杵が大倭に天降って行つたが、何故か逆方向の薩摩吾田に到つた。同じ時期に、天孫となった彦火明が大己貴と一緒に出雲・播磨・丹後宮津・大倭に移り住んだ。
(5)三十年足らず後の二四〇年代後半、火瓊瓊杵の兄・火照(海幸彦)が日向で火明を襲名し、出雲経由で大倭に向かった。途中の丹後宮津で饒速日も襲名して火明饒速日と称した後、大倭入りして日本家を立てた。ヒミコ亡き後、日本王朝を興し、ついで自ら天神に昇つた。

結局、火明は、天孫火明(彦火明、天火明)と火瓊瓊杵の兄・火明(火照、海幸彦、火明饒速日)の二人、饒速日も天孫饒速日(天鹿兒山の兄)、火明饒速日(海幸彦)の二人が居たことになる。

『古事記』

火照(海幸彦、隼人阿多君祖)

火スセリ

火遠(穂穂手見)

『日本書紀』

本文 火スセリ(海幸彦、隼人等が始祖)

火火出見(火折)

火明(尾張連の祖)

一書 火明

火スセリ

火火出見(火折)

◆大己貴が国譲りするとした天神の御子

→ 火天神の御子

日継ぎの御子の忍穂耳→大倭降臨を辞退

日神↓(1)自ら天神を降り、亡き天鹿兒山のみを天神として祀ると決断

(2)火天神の御子に移籍した火瓊瓊杵に、大倭降臨を下命

①日神と高皇産霊は忍穂耳に八咫鏡・天叢雲劍を授けて、再度大倭降臨を詔した。

「先ほど、葦原中つ国を平定した知らせを受け取った。葦原中つ国と豊葦原の千五百秋ちいほあきの瑞穂